

日本文芸論叢 総目録

■第29号 令和4年3月発行

- 丁 舒文 『古今和歌集』の恋歌と閨怨詩―「夕暮の秋風」を中心に―  
添田 千尋 『新古今和歌集』「花橘の袖にすずしき」考  
―想像の広がりを支える表現のしくみ―  
渡邊 美希 伴直方『枕冊子考』「清少納言の事跡」の考察  
―多田義俊『枕草紙抄』との関係に着目して―

■第28号 平成31年3月発行

- 百井 順子 『新撰和歌集』巻第三「別旅」の構成―語句の共通性を端緒として―  
渡邊 美希 伴直方『枕冊子考』と多田義俊『枕草子抄』の関係  
―『枕冊子考』「枕さうしと名つけし事」の検討を中心に―  
廣瀬 航也 永井荷風「放蕩」における都市歩行  
―日露戦後文学と意志をめぐる問題―

■第27号 平成30年3月発行

- 渡邊 美希 伴直方『枕冊子考』の『枕草子』本文  
―「攷異」所引本文と『枕草子』諸本の関係―  
大木 葉子 南吉作品における子どものまなざし  
―モチーフ形成の背景をめぐる―

■第26号 平成29年3月発行

- 西村 由希 『伊勢物語』京の外での詠歌―六十六、六十七、六十八段を中心に―  
春原 志織 『建礼門院右京大夫集』における平維盛―人物像の多層性に着目して―  
木戸浦 豊和 「感<sup>テレバシ</sup>応」としての文学―漱石・マイヤーズ・心霊主義―  
江畑 佐誉 『真空地帯』の語りの方<sup>テ</sup>法―二重の語りに着目して―

■第25号 平成28年3月発行

- 廣中 美穂 後期万葉の季節歌―「ヤド」詠歌をめぐる―  
于 楽 『平家物語』における不和と親和  
―後白河院、高倉院をめぐる関係に着目して―  
木戸浦 豊和 〈印象〉・〈観念〉・〈情緒〉  
―夏目漱石の〈文学の哲学〉とイギリス経験論―  
高野 裕樹 「南島譚」「環礁」論―中島敦の南洋植民地表象をめぐる―

阿部 美菜子 「片腕」における自己への問い―「私」の思考に着目して―

■第24号 平成27年3月発行

百井 順子 『伊勢物語』 東下りの旅―〈男〉の出立を中心として―

滝沢 美子 『蜻蛉日記』養女求婚記事における道綱母  
―仲介者という機能に着目して―

小澤 恵里奈 『枕草子』「五月の御精進のほど」における「雨」の表現  
―郭公探訪の表現と構成意図を巡って―

北島 優子 『雫に濁る』の結末―「めでたし」をめぐる―

大木 葉子 『赤い船』がもたらしたもの  
―小川未明『おとぎばなし集 赤い船』の位相―

■第23号 平成26年3月発行

笠間 はるな 「百花爛漫の世」へ ―樋口一葉「琴の音」論―

伊澤 亮太 『三四郎』論 ―長編小説の成立と写生文―

本多 遥 小林秀雄「私小説論」考(上)  
―「リアリズム」と「文学的リアリティ」をめぐる―

■第22号 平成25年3月発行

小野 貴裕 『源氏物語』句宮の「心ならひ」 ―光源氏との対比から―

笠間 はるな 月が照らす「妙変」 ―樋口一葉「軒もる月」論―

三好 隼人 『草枕』論 ―「不思議にも今迄かつて見た事のない『憐れ』」―

深澤 仁智 「湖畔」のたくらみ ―久生十蘭「湖畔」論―

■第21号 平成24年3月発行

高橋 早苗 『白露』論 ―男君の「心」に着目して―

木戸浦 豊和 夏目漱石『文学論』と〈同感(sympathy)〉の原理(上)  
―「(F+f)」と「間隔論」を中心に―

河内 聡子 創刊期『家の光』における課題としての〈農村〉

高橋 由貴 組み換えられる〈われわれ〉  
―大江健三郎「戦いの今日」と冷戦構造下の日本―

■第20号 平成23年3月発行

黒澤 祐司 郷愁の射程 ―嵯峨の屋おむろ「初恋」論―

木戸浦 豊和 夏目漱石『文学論』の修辞学

—Associationism(連合主義)を視座として—

- 河内 聡子 制度とメディア —雑誌『家の光』創刊の経緯に見る—  
仁平 政人 「漫想」する言葉 —尾崎翠における「映画」の翻訳—  
高橋 由貴 「人間の羊」における沈黙を囲む饒舌  
—大江健三郎と遅れてきた戦争(下)—

■第19号 平成22年3月発行

- 三浦 一朗 歴史との対話 —「白峯」論—  
仁平 政人 川端康成「散りぬるを」論 —「合作」としての「小説」—  
江 明瑾 問われた〈言葉〉 —太宰治「竹青」論—  
高橋 由貴 大江健三郎のアルバイト小説 —習作「火山」から「運搬」へ—

■第17・18合併号 平成16年3月発行

- 鈴木 早苗 「めでたき人かな」 —『源氏物語』若紫巻と司馬相如伝—  
久保 堅一 薫の暗い道心  
森沢 真直 『三体和歌』断簡について  
三浦 一朗 秘密の山と修羅 —「仏法僧」論—  
駱 昭吟 『女生徒』における色彩表現について  
—「有明淑の日記」との比較を中心に—

■第16号 平成14年3月発行

- 李 美淑 「思ふどちの御物語」と死霊出現  
—光源氏と紫の上の物語における一つの転機—  
河野 真奈美 『玉葉集』旅歌 —一四二番歌について  
三浦 一朗 那の重き業障 —「夢応の鯉魚」論—  
森岡 卓司 「熱風に吹かれて」の方法 —谷崎潤一郎に於ける夏目漱石(二)—  
河合 隆司 「地獄変」試論 —Forerunner との比較考察—  
高橋 秀太郎 太宰治「女生徒」成立考—構想メモと『有明淑の日記』(上)

■第15号 平成13年3月発行

- 斎藤 奈美 「風こそげに巖も吹き上げつべきものなりけれ」  
—野分巻の垣間見と紫の上の居所—  
李 美淑 「春秋のあらそひ」と六条院の「春の上」  
—「岩ねの松」の象徴性に着目して—

- 三浦 一朗 「性(さが)」と「神」 —「吉備津の釜」論—  
 マイケル・ボーダッシュ 贈与としての洋杖(ステッキ)  
 —夏目漱石『彼岸過迄』の社会学—  
 影山 雄太 都市モードの解体 —安部公房『箱男』—

■第13・14合併号 平成12年3月発行

- 李 美淑 『蜻蛉日記』の構造と意識  
 —「つれなし」「なほあらじ」を指標として—  
 齋藤 奈美 須磨巻の道真引用  
 河野 真奈美 西行の「その」 —表現機能に関する一考察—  
 森澤 眞直 定家歌「みわたせば花も紅葉も」論 —研究史の検証と解釈の秩序—  
 森岡 卓司 「門」を評す」と谷崎文学の理念的形成  
 —谷崎潤一郎に於ける夏目漱石(一)—  
 野口 哲也 「幻想劇」の舞台機構 —泉鏡花「夜叉ヶ池」論—  
 河合 隆司 芭蕉涅槃 —「枯野抄」試論—  
 高橋 秀太郎 太宰治「地球図」論 —「物語」と「知識」—

■第12号 平成10年3月発行

- 猿渡 学 六条御息所試論 —生霊創造の意味—  
 呉 起燾 『平家物語』清盛追悼説話群に関する一考察  
 —諸本の異同とその志向するもの—  
 三浦 一朗 「浅茅が宿」における哀傷の構図  
 —丹後国風土記逸文との関係を視野に収めて—  
 森岡 卓司 谷崎潤一郎「少年」における「眼瞼の裏の明るい世界」の形象  
 —〈光〉を巡る幻想の論理—  
 加藤 達彦 〈ふるさと〉の生成過程 —坂口安吾「ふるさとに寄する讃歌」論—  
 山崎 義光 島木健作『癩』『盲目』と亀井勝一郎の初期評論  
 野坂 昭雄 立原道造「風立ちぬ」の構造に関する試論  
 —「対話」と「問ひ」をめぐって—

■第11号 平成9年3月発行

- 寺窪 健志 夏の夜のひぐらしの声 —大伴家持「晩蝉歌」試論—  
 猪平 直人 梅と桜 —『大和物語』の創作意識をめぐる試論—  
 森澤 眞直 俊成「夕されば」と『伊勢物語』 —言説の位相とコンテクスト連関—  
 蔡 惠淑 『徒然草』の一考察 —兼好の美意識の背景をなすものについて—

- 半沢 みゆき 告白というかたち —『三人法師』試論—  
鄭 旭盛 武者小路実篤「お目出たき人」論  
—「自分」の「空想」をめぐる—  
野坂 昭雄 新即物主義から『わがひとに与ふる哀歌』へ  
—伊藤静雄における「反省」—  
山崎 義光 「水にとび込んだナルシス」あるいは方法としての「写真」  
—三島由紀夫『獣の戯れ』—

※鈴木則朗教授略歴・主要業績目録

■第9・10合併号 平成6年10月発行

- 糸賀 きみ江 岡崎先生と新古今歌人  
津田 大樹 亡き人への相聞歌 —万葉集卷四岡本天皇御製をめぐる—  
朴 潤鎬 『蜻蛉日記』と『建礼門院右京大夫集』に関する一考察  
—作者の自己認識を中心として—  
増田 真奈美 中世和歌の「にほふ」世界 —〈にほふ声〉を中心に—  
赤間 亜生 『春昼』『春昼後刻』論  
顧 錦芬 漱石「菜花黄」詩考 —中日詩における菜花の比較を通して—  
王 秀珍 『明暗』論 —「不可思議な力」の支配する世界—  
申 基東 「戯作三昧」の世界 —馬琴の戯作三昧境の獲得の過程—  
和田 茂俊 「六の宮の姫君」の芸術的反抗 —「筋」という形式の顕在化と否定—  
李 光華 志賀直哉における「家」  
高 恵玲 志賀文学における「夢」  
黄 翠娥 川端文芸における〈鏡〉の考察  
—「浅草紅団」「雪国」「水月」を中心に—  
中村 三春 反エディプスの回路  
—『海辺の光景』における〈大きな物語〉の解体—  
柳澤 裕子 〈研究ノート〉『源氏物語』の浮舟をめぐる一考察  
林 明秀 『偷盗』の比較文学的考察 —沙金を中心として—  
申 基東 「偷盗」における愛と愛欲の実態 —太郎を中心として—  
管 美燕 芥川龍之介の「偷盗」における母性的世界 —阿濃を中心として—  
林 丕雄著・林 皓碧訳 石川啄木と中国（翻訳）  
エステラ・ゼロムスカ 曼陀羅的日本文化の中へ回帰しつつある日本の現代演劇の世界  
(論文要旨)  
エステラ・ゼロムスカ ベケットと日本演劇（論文要旨）  
菊田 茂男 〈書評〉新田孝子著『多武峯少将物語の様式』

- 菊田 茂男 <書評> 本林勝夫著『斎藤茂吉の研究 その生と表現』  
菊田 茂男 <書評> 錦仁著『中世和歌の研究』  
菊田 茂男 <書評> 清田文武著『鷗外文芸の研究 青年期篇』  
『鷗外文芸の研究 中年期篇』  
菊田 茂男 <書評> 陳明姿著『唐代文学と平安朝物語の比較文学的研究』  
菊田 茂男 <書評> 林水福著『讃岐典侍日記の研究』

■第8号 平成2年3月発行

- 頼 振南 『竹取物語』の「色好み」について —求婚・難題譚を中心として—  
堀 淳一 老若への視線 —『紫式部日記』に見る作者の年齢的位置への試論—  
金 京淑 『和泉式部日記』における心情表現  
—「つれづれ」「はかなし」を中心として—  
佐野 正人 『松浦宮物語』論 —新古今時代の唐土—  
金 粉淑 「月」の表現に見られる兼好の美意識  
深澤 昌夫 道行文体試論  
関根 俊二 『浮雲』における主人公の自己意識とその表現  
—「意気地なし」をめぐる論争—  
林 明秀 『夢十夜』における女性像と愛 —第一夜、五夜、九夜を中心に—  
江 裴倩 宮沢賢治の自然観 —原始的自然観を中心に—  
林 鍾碩 芥川龍之介「偷盗」の世界

■第7号 平成元年7月発行

- 李 元熙 歌人伊勢における心情表現 —『伊勢集』冒頭部分を中心に—  
李 英敬 『枕草子』の動的な美の表現 —人事の描写を中心に—  
佐倉 由泰 覚一本『平家物語』における平氏一門の運命の表現  
—平重盛、平知盛、建礼門院の存在様態と機能に着目して—  
氏家 千恵 『宇治拾遺物語』における多元的契機の展開  
—第一話「道命於和泉式部許読経五条道祖神聴聞事」をめぐって—  
深澤 昌夫 「旅」の文芸序説 —「旅」の意味するもの—  
金 貞礼 芭蕉俳諧における「さび」の考察 —「さびし」の句を中心として—  
張 南瑚 『こころ』試論 —死の意味を中心として—  
伊狩 弘 「新しい家」の虚妄 —『家』に関する一考察—  
寺沢 浩樹 「お目出たき人」の世界 —自然と自己—  
千葉 正昭 久保田万太郎『朝顔』素描  
横路 昭夫 川端康成「白い満月」論 —〈語り手〉とお夏の構造的機能—

■第6号別冊 昭和63年3月発行

菊田茂男監修・高橋清隆編述 東北大学附属図書館所蔵 仮名草子書誌解題目録稿

■第6号 昭和63年3月発行

- 李 元熙 『古今集』における時間意識
- 渡辺 仁史 弘徽殿女御小論 —『源氏物語』における悪—
- 斎藤 正昭 明石入道論 —その入山に至る精神構造—
- 伊勢 英明 『紫式部日記』に〈書かれた主題〉  
—紫式部が〈書こうとした主題〉とのかかわりにおいて—
- 李 英敬 『枕草子』の動的な美の表現 —雪を中心に—
- 竹内 忠昭 『浜松中納言物語』の構想 —「姉妹」の役割から—
- 金 粉淑 兼好の人間観 —とくに「よき人」を中心として—
- 林 鍾碩 森鷗外『雁』における女性「お玉」  
—『人形の家』の「ノラ」にも触れて—
- 寺沢 浩樹 「お目出たき人」の虚構性 —素材の作品化の問題をめぐって—
- 林 水福 『わたしが・棄てた・女』における神と罪

■第5号 昭和61年3月発行

- 小島 雪子 光源氏と紫上 —「賢木」巻を中心として—
- 斎藤 正昭 帚木三帖の方法  
—「雨夜品定め」と空蝉・夕顔・六条御息所の関係—
- 竹内 忠昭 孝標女の構想 —姉の死をその接点として—
- 李 元熙 『古今集』恋の歌における「川」のイメージ
- 志立 正知 『平家物語』における「都遷」について
- 原田 香織 昔男に移り舞 —『井筒』の作品世界—
- 本田 香織 『本朝二十不孝』に描かれた孝
- キャロル・ヘイズ 『堀辰雄詩集』について
- 高橋 美喜 静雄詩の出発 —「子規の俳論」にみる詩作意識と方法—
- 黄 翠娥 『伊豆の踊子』における観照者性
- 大沢 正善 「よだかの星」論 —「修羅」の視線—

■第4号 昭和60年3月発行

- 中村 三春 有島武郎「或る施療患者」と〈表現主義〉への接近
- 大沢 正善 「虔十公園林」論 —「デクノボー」の神話—

- 林 鍾碩 川端康成『十六歳の日記』小論  
 —創作動機と「おみよ」の役割に見られる虚構性をめぐって—
- エステラ・ゼロムスカ 安部公房とハロルド・ピンターにおける孤独と脅威の感覚
- 本田 香織 『好色一代男』試論 —世之介の到達点—
- 佐藤 晃 『宇治拾遺物語』における言語遊技と表現
- 内山 智子 『浜松中納言物語』と夢
- 斎藤 正昭 紫上の登場 —古物語的女主人公の造形方法—
- 紙 宏行 〈解題と翻刻〉『和歌淵底秘抄』
- 菊田 茂男 『更級日記』の精神的基底 —物語的世界への同定と訣別—
- ※哀悼 津嶋真人君 鈴木 則郎

### ■第3号 昭和59年3月発行

- 小島 雪子 空蝉との恋 —光源氏の間像に関する考察—
- 伊勢 英明 『紫式部日記』成立に関する試論 —三段階的成立の仮説—
- 林 水福 『讃岐典侍日記』上下巻における「われ」の位相
- 佐藤 晃 『宇治拾遺物語』の説話配列における表現方法
- 高橋 清隆 仮名草子『仁勢物語』論 —「にせ男」としての作者—
- 本田 香織 『好色五人女』試論 —巻一「姿姫路清十郎物語」を中心として—
- 寺沢 浩樹 「その妹」の悲劇性 —生命力表現の変容—
- 中村 三春 「石にひしがれた雑草」における三者関係の構図
- 堀 竜一 自己同一化と破滅  
 —福永武彦の文芸における二重人格的人物像の系譜—
- 小沢 信博 「芽むしり 仔撃ち」までの大江健三郎  
 — ((收容所もの)) ((谷間の村もの)) における〈自我の覚醒〉—
- 紙 宏行 〈解題と翻刻〉『和歌密書』(抄)
- ※哀悼 奥崎 永さん 菊田 茂男

### ■第2号 昭和58年3月発行

- 堀 竜一 『風土』論 —ゴーギャン・モチーフの分析—
- 大沢 正善 「心象スケッチ」の成立 —「山地の稜」を契機として—
- 中村 三春 「カインの末裔」における永遠回帰の構造
- 佐藤 晃 『宇治拾遺物語』の和歌説話 —主題の相互関連性の視点から—
- 福田 景道 『増鏡』の世界 —「皇位継承」の意義をめぐって—
- 渡辺 仁史 紫上の愛 —『源氏物語』第二部における役割と意義—
- 小島 雪子 光源氏前史と光源氏の生 —『源氏物語』の始原的状況に関する考察—



高橋 清隆 三輪山の歌（『万葉集』巻一、17～19番歌）の一解釈

リン・K・ミヤケ

『多武峯少将物語』における「涙」のイメージと比喩についての研究（要旨）

A STUDY OF THE IMAGES AND METAPHORS OF TEARS IN  
TONOMINE SHOSHO MONOGATARI

■第1号 昭和57年3月発行

中村 三春 有島武郎「運命の訴へ」の中絶

大沢 正善 「心象スケッチ」「修羅」の原流 —大正十年以前の宮沢賢治—

石川 秀巳 『椿説弓張月』試論 —『保元物語』と虚構の方法—

高橋 清隆 仮名草子『竹斎』小論

紙 宏行 題詠による詩精神の形成 —俊成の「本の心」とその周辺—

福田 景道 『大鏡』『大臣列伝』における栄華の実現 —外戚関係と子孫繁栄—

呉羽 進 東北大学附属図書館所蔵 源氏物語 古註旧註 注釈書解題

（注釈の部）

Water Imagery in Tonomine Shosho Monogatari :The Role of The River